

八十種好再考

岡田行弘

1. はじめに

八十種好 (asityanuvyañjana) とは、仏・如来の身体に具なわっている80種の吉相であり、三十二大人相 (dvātriṃśanmahāpuruṣalakṣaṇa) と並列して仏典中にしばしば登場する術語である。anuvyañjana (随好, 随形好, 妙好, 好) は, lakṣaṇa (相) に比べて付随的・副次的な役割を持つものであって「細かなすぐれた特徴」などと訳することができる。筆者はこの八十種好について仏典中の記述を整理し、比較した研究を発表した¹⁾。そこでは八種の梵文仏典、十八種 (21箇所) の漢訳仏典を取り上げ、随好の選択と配列という基準で分類を試みた²⁾。まずその小論の「結語」(以下〈 〉で示す) を振り返りながら再考すべき問題点を明かにする。

〈a. 八十種好は三十二相の補完的なもので、その全体の価値は一つの大人相よりも低い。〉

相と好の関係についての説明である。すでに論じた通りである。

〈b. 各随好の選択と配列は紀元後3—4世紀になってもまだ確定していない。〉

これは一応正しい。さらに八十種好の原型は何か。はじめにどの好が選択され配列されたのかを考察する必要がある。

〈c. 『『現觀莊嚴論』(Abhisamayālaṃkāra) はそれ以後の梵文仏典のモデルとなり、後期の漢訳仏典は玄奘訳『大般若』の記述を基準としている。³⁾〉

『現觀莊嚴論』が依拠した『二万五千頌般若』を考慮していなかったのは適当でない。後述する。

〈d. 系統を大別すると身体の小部分の具体的特徴のみを挙げる Abhisamayālaṃkāra と仏の説法というような拡大した概念を随好に含める『般若経』(=『大般若』・『摩訶般若』) とに二分される。〉

これは正確ではなく、訂正を要する。『般若経』の記述を整理しながら、本稿で再論する。

〈e. 三十二大人相の系統と八十種好の系統は必ずしも一致しない。〉

問題なし。

また以上の小論をまとめた後、本庄良文助教授の研究によりシャマタデーヴァの八十種好に関する重要を記述を知ることができた⁴⁾。『俱舍論註』の八十種好を説明する箇所ではシャマタデーヴァは『二万五千頌般若』とナーガールジュナの『十住毘婆沙論』の偈を引用しており、またマートリチェータの讃仏詩と『菩薩地』⁵⁾にも言及している。また「四阿含・バーダリ称讃の経・『如大海論』に相と好とが述べられ、論じられている」として引用されているものは、72種の随好が挙げられている。これは *Abhidharmadīpa* によく一致している⁶⁾。このようにシャマタデーヴァの記述は八十種好の研究にとって見過ごすことのできない資料である。

2. 『般若経』における八十種好の出典箇所

以上のような経過から、『般若経』の梵本・チベット訳に見られる八十種好の記述を検討することが要請されるのである⁷⁾。ことに成立時代を視野に入れると、八十種好の「原型」と見なせるものが、大乘仏教の法数・術語が整備されている大品系の『般若経』にあらわれている。なお『八千頌般若』をはじめとするいわゆる小品系の『般若経』には、八十種好という言葉は登場するものの各随好が列挙されることはない。

大品系の漢訳である『放光般若経』(291年、無羅叉訳)には随好の列挙はない。拙稿で既に論じた漢訳以外に八十種好の完全なリストがあるのは梵本の『二万五千頌』・『一万八千頌』⁸⁾とチベット訳の『十万頌 (蔵)』⁹⁾・『二万五千頌 (蔵)』¹⁰⁾・『論部二万五千頌 (蔵)』¹¹⁾・『一万八千頌 (蔵)』¹²⁾・『一万頌 (蔵)』¹³⁾である。なお『十万頌』の当該箇所の梵本は未出版である。また『二万五千頌』の梵本は『現觀莊嚴論』との対応でいえば第七章までが出版されているが、八十種好の記述がある第八章法身に相当する部分は未完である。しかし E. Conze がこの部分を英訳しているのでその内容を知ることができる¹⁴⁾。以上ではこれを『二万五千頌 (蔵)』と略記する。

3. 『二万五千頌 (梵)』の系統

このグループの八十種好は『二万五千頌般若』を起点とし『現觀莊嚴論』(Ⅷ, 21-32)を経て Ārya Vimuktisena¹⁵⁾, Bhadanta Vimuktisena¹⁶⁾ Haribhadra¹⁷⁾の注釈類に継承されている。そして注目すべきことに『般若経』のチベット訳のうち『一万頌』以外のもの、すなわち『十万頌 (蔵)』・『二万五千頌 (蔵)』・『論

部二万五千頌(藏)』・『一万八千頌(藏)』はこの『二万五千頌(梵)』に基づいて訳されているのである。特に『十万頌(藏)』・『二万五千頌(藏)』・『論部二万五千頌(藏)』は訳語の選択に至るまで同一である。『一万八千頌(藏)』は訳語の選択が異なっている箇所もあるが、八十種好の選択・配列は『二万五千頌(藏)』と一致している。後述するように『一万八千頌(梵)』はこのグループとは別の系統である。この事実からチベットにおいては『二万五千頌(梵)』=『現觀莊嚴論』の八十種好がいわば正統説となっていることが確認できる。したがって『般若經』を訳出する際、梵本のいかに関わらず、この立場からの統一が図られたのである¹⁸⁾。

さてこのグループは全体として選択・配列のばらつきが少ない¹⁹⁾。このグループの特徴は仏・如来の善行・菩薩行とそれぞれの随好が結び付けられて説明されていることである。例えば

「仏・世尊はあらゆる行(サンスカラ)から離脱しているから、指の爪が赤い。あらゆる衆生に対して利益と安楽を心がけているから、爪が滑らかである。」

というような記述である。これは他の八十種好の系統には見られない。このグループに属する唯一の漢訳が『十住毘婆沙論』(以下『十住論』と略)である²⁰⁾。三十二大人相の記述について『十住論』が『二万五千頌般若(梵)』をそのまま翻訳して用いていることは既に指摘したが²¹⁾、八十種好の場合も同様なことが言える。またシャマタデーヴァは八十種好の説明で『十住論』をナーガールジュナの偈として引用する²²⁾。『十住論』の偈は24行あるが、これは『現觀莊嚴論』の12偈にそのまま一致していると見ることができる。偈で八十種好が網羅されているのは、これ以外にはない。『十住論』はこのグループにおいて『二万五千頌般若(梵)』と『現觀莊嚴論』の中間に位置付けられるのである。

4. 『一万八千頌般若(梵)』の八十種好とその展開

『一万八千頌(梵)』の八十種好のリストを『二万五千頌(梵)』のグループのそれと比較してみると、まず配列順序に関しては最初の20番目までと最後の約15ほどの随好については、ほぼ一致している。また中間も『一万八千頌(梵)』の第43番目から59番目までが、『二万五千頌(梵)』の第33番目から49番目に対応している。この点、両者はかなり近い関係にあると言えることができる。しかし随好として選択されているものが約10種ほど相違している。『二万五千頌(梵)』では身体の小部分(手紋、爪、髪、腹部、舌など)について数個ずつの随好を立てている。これは

『一万八千頌 (梵)』も同様なのであるが、それぞれの部分に割り当てられている随好が『二万五千頌 (梵)』よりも若干簡略になっている。例えば『二万五千頌 (梵)』は、歯について5種、舌について3種、鼻については2種の随好を立てているが、『一万八千頌 (梵)』ではこれらについて順に3種、2種、1種の随好が説かれている。その代り『一万八千頌 (梵)』には『二万五千頌 (梵)』にない次の随好が登場する (対応する『大品般若』の訳語を示す)。

- | | |
|-------------------------------------|----------|
| 24. iryapathasampanna | 容儀備足 |
| 25. asthānusampanna | 住处安無能動者 |
| 30. avalokaniya | 一切樂觀 |
| 57. candramukha | 面淨滿如滿月 |
| 60. sarvākāraparipūrṇasvara | 隨衆生意和悦与語 |
| 75. samantavyāmaprabhayā avabhāṣita | 辺光各一丈 |

これ以外でも『一万八千頌 (梵)』にはやや抽象的な表現が使用されている随好が散見される。

そして漢訳との関連で言えば、上で示したように『一万八千頌 (梵)』にあって『二万五千頌 (梵)』においては欠けている随好が、鳩摩羅什訳の『大品般若 (摩訶般若)』では八十種好として挙げられている²³⁾。換言すれば八十種好に限定した場合、『大品般若』は『二万五千頌 (梵)』よりも『一万八千頌 (梵)』に近いのである。『大品般若』は身体の小部分を中心に列挙していく『二万五千頌 (梵)』とは異なり、『一万八千頌 (梵)』に見える抽象的な随好以外にも、例えば仏の説法の方法と言うようなものも随好として挙げられている。玄奘訳の『大般若』²⁴⁾は『大品般若』の方向をさらに進めて、仏の偉大性・優越性を強調するために各随好の説明も詳細になっている。しかし注意すべきことは、その記述が随好自体の特徴の説明であって『二万五千頌 (梵)』に見られるような仏の善業との結び付きは何も説かれていないということである。

なお『一万頌 (藏)』において八十種好は仏教術語集的な性格を持つ第二章で説明されている。詳説する余裕はないが、この八十種好は『大品般若』と『大般若』の中間的な位置を占めていると見ることができる。

5. おわりに

仏には常人にはない三十二相の他に、八十種好が具わっているという概念が生まれたのはそれほど古い時代ではない。八十種好の記述を積極的に行いはじめた

のは、仏の誕生時の超人性を記述しようとする仏伝作者と、大乘仏教の法数を整備しようとした般若経制作者である。*Mahāvastu* と *Lalitavistara* には八十種好のリストがあるものの、古い時代の仏伝の漢訳(『普曜経』など)には八十種好は見られない。いずれが八十種好の原型かということは現段階では決定できないが、*Mahāvastu* と並んで『般若経』の二種、すなわち『二万五千頌(梵)』と『一万八千頌(梵)』はその有力な候補である。この二者のいずれが古いかは速断できない。敢えて言えば、『二万五千頌(梵)』は随好と善行の結び付きを整備された形式で説いているので、より単純な『一万八千頌(梵)』のほうが、やや先行しているように見受けられる。

- 1) 拙稿「八十種好」『〈我〉の思想 前田専学博士還暦記念論集』春秋社1991, pp. 611-627.
- 2) ちなみにこれは三十二大人相を記述する箇所約二割強である。
- 3) 『現観莊嚴論』と『十住毘婆沙論』の対応表、『摩訶般若(大品般若)』(羅什訳)と『大般若』『無上依経』『勝天王般若経』の対応表を提示した。(注1拙稿参照)
- 4) 本庄良文「シャマタデーヴァの伝へる阿含資料—一品(3)仏の相好—」神戸女子大学(文学部)紀要24L巻1990.
- 5) 『菩薩地』(*Bodhisattvabhūmi*)の解説はシャマタデーヴァが「勝れたものではないから、信頼を起こすものではない。ゆえに受け入れられない」(前掲本庄論文 p. 256)と述べているように、独特で例外的なものである。(前掲拙稿 p. 614参照)
- 6) P. S. Jaini; *Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāvṛtti*, Patna 1977, pp. 190-192. 本庄助教授も、同書を参考にして梵語を想定しておられる。なおアビダルマディーパの八十種好記述はかなり詳細であって、『大般若』と共通する点も少なくない。八十種好の概念が成立してからかなり、発展を遂げた後の段階のものであるように見受けられる。
- 7) 同じ視点で三十二大人相に関する小論をまとめた。拙稿「般若経典における三十二大人相」『今西順吉博士還暦記念』(近刊)
- 8) Edward Conze, *The Gilgit Manuscript of the Aṣṭādaśasāhasrikā Prajñāpāramitā, Chapters 70-82 corresponding to the 6th, 7th and 8th Abhisamayās, Serie Orientale Roma XLVI*, 1974, pp. 49-51.
- 9) Ta (=台北デルゲ版) 8, Vol. 5, A52a; P (=大谷北京版) 730, Vol. 17, Chi 352b.
- 10) Ta 9, Vol. 6, A 237a; P 731, Vol. 19, Di 135a.
- 11) Ta 3795, Vol. 32, Ca 244a; P 5188, Vol. 90, Ca 281b.
- 12) Ta 10, Vol. 7, Ga79b; P 732, Vol. 20, Phi 91b.
- 13) Ta 11, Vol. 7, Ga(?) 15b (=p. 151. 一段目); P 733, Vol. 20, Phi 238b.
- 14) Edward Conze, *The Large Sutra on Perfect Wisdom*, California, 1975, (Rep. Delhi 1979). 同書は『一万八千頌』を中心とする研究であるが、Appendix IIにお

- いて、『二万五千頌』の当該箇所が英訳されている。(pp. 661-664)
- 15) 『現観莊嚴注』 Ta 3292, Vol. 32, Ka 203a (東北 3787)
- 16) 『現観莊嚴頌釈』 Ta 3793, Vol. 32, Kha 172b (東北 3788)
- 17) 『小注』 Ta 3798, Vol. 33, Ja 136a (東北 3793) 真野竜海『現観莊嚴論の研究』山喜房仏書林1972, p. 255以下参照。『大註(現観莊嚴光明)』Wogihara ed. p. 920f; Ta 3796, Vol. 33, Cha 320b (東北 3791)
- 18) 同様の事実は三十二大人相の訳出においても見られる。注7の拙稿参照。
- 19) 唯一の例外と言えるものに *viśuddhanetra* (“清浄なる眼”)があるこの随好は『二万五千頌(梵)』及び注釈類では27番目、『十万頌(梵)』『二万五千頌(藏)』では61番目、『一万八千頌(藏)』では60番目に登場する。またその説明については、經典および Ārya Vimuktisena までは「眼差しが清浄であるから御眼が清浄である」(*gzigs pa śin tu rnam par dag pas na spyen rnam par dag pa dañ...*, **suviśuddhālokād suviśuddhanetraḥ*)とあるのに対し、Bhadanta Vimuktisena 以下の注釈では前半の部分が「清浄なる法を説くから」(*rnam par dag pa'i chos ston pa'i phyir...*, *suviśuddhadharmadeśanād...*)と変更されている。
- 20) 大正(No. 1521), Vol. 26, 69c(長行), 71(偈)
- 21) 拙稿「三十二大人相の成立」『勝呂信静博士古稀記念』(近刊)中, 三. 初期大乘における三十二相参照。
- 22) この事実は本庄助教が指摘しておられる。注4本庄論文 p. 247参照。
- 23) 『摩訶般若波羅蜜多經』大正(No. 223) Vol. 8, 395b以下。注1の拙稿の一覧表参照。
- 24) 『大般若波羅蜜多經』大正(No. 220) Vol. 6, 968a; Vol. 7, 377a, 726b. 960a. (1995. 7. 25)

〈キーワード〉 八十種好, 『二万五千頌般若』, 『一万八千頌般若』

(神戸女子大学瀬戸短期大学助教授, Ph. D.)

新刊紹介

井ノ口泰淳 著

中央アジアの言語と仏教

A 5 判・390頁・定価 14,935円

法蔵館・1995年11月